

## 随 筆

### インドの思い出と仏教への関心

岡江 俊治

海外への渡航歴は特に多いわけではありません。そのためでしょうか、何十年たっても強く印象に残っている国があります。私の場合はインドとなります。アメリカへも数回訪問しましたが、ほとんど観光はしなかったためか、大学やショッピングモールが印象に残ったぐらいです。インドを訪問したのは25年前と4年前の2回です。前者では3か月弱、後者では1週間程度でした。いずれも観光が目的ではなく、放射線診療に関係した出張でした。その期間中、色々な方のご厚意によりインド国内の多くの土地を訪問することができました。特に25年前は同時期に出張していた他の診療科の先生がおみえになったのが幸運でした。その先生は大変活動的な方で、インド国内の様々な遺跡、寺院の訪問を提案され、そのいくつかには私は同行させていただくことができました。

当時の日記や撮影したプリントを見返し、そして4年前の訪問場所を合わせて挙げてみます。ラクナウ、バナーラス、サールナート、カジュラーホー、アジャンター、エローラ、ムンバイ、アーグラ、シラーヴァステイー、デリー、ゴア等です。このうち、ラクナウはイスラム教寺院が多数あり、バナーラスはヒンズー教の聖地です。カジュラーホーはヒンズー教寺院群です。ゴアは日本で初めてキリスト教を伝えたフランシスコザビエルのミイラが安置されているキリスト教会が立ち並ぶポルトガルの旧植民地です。ムンバイやデリーは大都市で、遺跡や寺院よりも主に博物館や動物園を訪れました。アーグラへは有名なタージマハル廟の見学です。その他の訪問地は仏教の寺院や関係した遺跡でした。ヒンズー教の遺跡や寺院、あるいは聖地では、地元の人が多く訪問しているためか、華やかであり、にぎやかな印象です。しかしながら仏教寺院や遺跡には訪問者は少なく、静かで穏やかな雰囲気でした。とくにブッダ（ゴダマシッタータ：仏教の開祖）が最も多く雨安居（うあんご：寺院の原型）を過ごしたシラーヴァステイー（日本では平家物語で有名な祇園精舎の場所です）には立派な建物や庭園、像などはありませんでしたが、静寂と明るさ、希望の雰囲気に満ちた不思議な空間であったと、今になって思い出されます。同行された先生は、ご両親へのお土産として、ブッダがその下で座禅を組んでい

たとされる菩提樹の落ち葉を大事に日本へ持ち帰られたそうです。サールナートはブッダが初めて説法を行った地とされ、公園の形で存在していました。アジャンターやエローラにはともに石窟寺院群があります。ここは事情があって一人で訪問しました。今でも印象に残っているのは、乗り継ぎの飛行機が遅れて、5時間空港で待ちぼうけとなったり、また申し込んだ観光ツアーのガイドさんが私の滞在していたホテルに立ち寄るのを忘れたため、ホテルの従業員が親切にも途中まで車で案内していただいたこと等です。アジャンターは29の洞窟に壁画や彫刻、像などがあります。エローラは岩山や石を鑿と金槌を使って100年以上かけて完成した寺院を中心として34の石窟からなります。厳密には仏教寺院だけでなく、ヒンズー教やジャイナ教の寺院も混在しています。これらの石窟は一番古いもので紀元前2世紀から存在し、最新のものでも紀元8～10世紀に造られたとされています。いずれにしても、人間の手で岩や石を削ったことは間違いなく、現代の建設機械を使ったとしても何年かかるかわかりません。そう思うと当時の人々の神への愛着と信仰の厚さに感動させられます。また、発心すればどんな困難な大事業も達成できるという希望も与えてくれます。インドにはこのような遺跡や寺院が至る所にあります。とくに仏教に関連したものは日本人にとって、京都や奈良の寺院で見たような仏像や説話の絵画が多くありますので、ある種の懐かしさを感じるのではないのでしょうか。アジャンターの菩薩画が法隆寺金堂の壁画と非常によく似ているといわれているのもその一例です。子供の頃からお経が身近にあった家庭でもありましたので、自然に仏教への関心が高まっていきました。

旅行したあとに常に反省することがあります。それはしっかり下調べをしてから訪問すればもっと満足度の高い見学ができたのでは、という後悔の気持ちです。それでも、今思えば、25年前や4年前の訪問の際にも、その時点ではもう今後ここへ来ることは二度とないだろう、というある種の感慨や寂しさを常に持っていました。

今後、またインドに訪問できるチャンスがあるようでしたら、ぜひ行ってみたいのがブッダに関連した土地です。①ルンビニー：現在はネパールの領土となっており、インドとの国境付近にある町で、ブッダ生誕の地とされています。②ブッダガヤー：ブッダが35歳の時に覺りを開いた場所です。③クシナガラ：ブッダが80歳の時入滅（永眠）した地です。④サーンチー：ブッダの遺骨をインド全土に再分配したアショーカ王が建てた巨大はストゥーパ（仏塔）がある場所です。ちなみにブッダが荼毘に付されたあとの舍利（遺骨）は、当初8つに分配されましたが、200年後にアショーカ王が再分配してインド各地に8万

4千のストゥーパを建てて供養されたそうです。その後最初の8つに分配されたものから発見された舍利の一部は分骨され、タイ王国から日本にも贈られて、名古屋の覚王山日泰寺に納められたそうです。奇しくも国内の同じ地区に納められていることを知ったときは、驚きとともに、とてもありがたい気持ちになりました。

以上インド訪問の思い出とともに、個人的な仏教への関心について述べさせていただきます。

今後残りの人生で医学以外に学んでいきたいことは何かと尋ねられれば、そのひとつが仏教であり、さらにいえばブツダという人そのものです。「覚ったひと」という意味であるその人物の、一生や言葉をいろいろな書物を通して触れていくつもりです。インド訪問はそのきっかけとなったといえます。機会を与えてくださった方々に対して、生涯ご恩を忘れないようにしたいと思っています。

(安城更生病院前副院長)

